ISSN　2189-1826

月刊ニューズレター
現代の大学問題を視野に入れた
教育史研究を求めて

第27号　2017年3月15日

編集・発行　『月刊ニューズレター　現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
（編集世話人　冨岡勝・谷本宗生）
連絡先　大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部　冨岡研究室
e-mail:　tomiokamasa@kindai.ac.jp
HP（最新号とバックナンバーを公開中）
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

コラム 山本剛氏のコラム「初年次教育は日本語教育」に感あり	神辺　靖光	2
逸話と世評で綴る女子教育史（27） 京都府上京30区・29区の正貞女紅場	神辺　靖光	4
1932年6月の東京帝国大学文学部教育学科教授評判記 ―雑誌『東大文化』第2号の「クラスルーム」から―	谷本　宗生	8
大正期における宗教系私学の大学昇格⑤ ―真宗大谷派の2つの教育機関に関する考察（1）―	雨宮　和輝	10
学生課・学生部について③　『九州大学五十年史　通史』	山本　尚史	14
近代日本における大学予備教育の研究(27) ―予科の学科課程　日本医科大学②―	山本　剛	17
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（27） 学校沿革史にみる補習科・専攻科（23）：広島県（1）	吉野　剛弘	22
学生寮の時代⑯　―寄宿舎の「弊害」とは何か―	金澤　冬樹	26
どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（25）　―東京府立第一中校学長川田正澂の校友会活動観(その9)―	冨岡　勝	30
刊行要項（2015年6月15日現在）		34
編集後記		35

コラム

山本剛氏のコラム「初年次教育は日本語教育」に感あり

神辺（かんべ）　靖光（やすみつ）
（ニューズレター同人）

本誌第25号の山本剛氏のコラムを興味深く読んだ。最初のショックは、え、なんで大学で日本語教育!!。しばらくたって“当然やるべきだ。よくやった”の感想を持った。

最初の“大学で日本語教育”の驚きは私が古い大学の体質を批判しながらも、いまだそれが身にしみついているからである。私は1949年、できたばかりの新制大学一期生であるが、旧制大学と併存時代で、旧新学生同席の授業もあったし、教授たちはみんな旧制度大学とかけ持ちであった。ゆえに新制度学生も大学とはこんなもんだという気分で、新制大学を旧制からの連続でとらえていた。私が入学したのは文学部でお世辞にも勉強家の集まりとは言えなかったが、文章を書くことと喋ることは達者な連中ばかりで、詩を書く、小説を書く、評論家になるなどと嘯（うそぶ）いて、教室や廊下に同人誌が並べられているのが常だった。復員者も多く兵隊服でキャンパスを闊歩するその先には髪をふり乱した左翼学生が壇上でレッドパージ反対の演舌を連日、叫んでいた。その演舌の上手なこと、いつも群衆がとり囲んでいた。要するに真面目な勉強はしないまでも、文章を書くことと話術は巧みだった。だからゼミでの発表も、卒業論文も内容は随分、直されたが、文章を直されたことは殆んどなかった。

学生の文章下手を深刻に受け止めたのは1986年から兵庫教育大学と大学院で卒業論文、修士論文の指導をした時からである。少なからぬ学生の文章が幼稚であった（当大学の名誉のために言うが大多数の学生は通常の文章を書いていた）。これまで早稲田大学の非常勤講師時代に裏仕事として修士論文を指導したが、文章の下手な者はいなかった。兵庫教育大学の大学院は現職教員の研修学校であるが、文章を箇条書きにして、論理的な長文を書かない、書けない癖の院生が何人かいた。みな小学校教員である。児童に注意を促す文書を箇条書きにするからであろう。この時期はまたワープロ書類が普及した頃である。長文がなくなったことと関係があろうか。

次に驚いたのは兵庫教育大学を定年退職して東京の私立大学に移った時である。騒がしいはずの大教室の授業が妙に静まりかえっている。みれば学生は下を向いてスマートホンで何らや通信し合っている。窓から外にいる

友人を呼ぶのにも大声をあげないで、スマホによる。文章はますます短文になり、妙な言葉で意味が通じなくなった。

最近二、三十年の学生の文章能力劣化は明らかである。革命的な文章機器の発達普及と学生の読書ばなれが、文章能力劣化の一つの要因であることは間違いない。しかし教育学を専攻するわれわれとしては、それだけですませてよいのであろうか。私世代の大学教員は、大学は学問するところだから、文章指導や話し方指導などはしない。それは高校以下の学校ですることだと嘯いていた。大学教授の肩書を必要以上に顕示する鼻持ちならぬ同僚を沢山みてきた。しかし思えば、私どもが大学生だった頃の1950年頃と今では大学の数も学生数も桁違いに違うのである。恵まれた旧制中学生や旧制高校生は充分な時間、読書や議論をしてきたから大学生にもなれば文章は上手に書け、話しぶりもうまかったのである。今の学生は激しい受験勉強はしたが、読書や議論の時間がなかったから、入学してから文章の稽古、話し方の稽古をしなければならないのだ。かくして、山本剛氏のコラムが紹介した某国立大学の一年次必修科目「情報リテラシー」「日本語表現法」の授業開設に大賛成する心境に達した。

しかしここまで思考をつないで、はたと止まった。

①大学入学の前提となる普通科高校の国語授業はどうなっているのだろう。高等普通教育たる高校普通科の国語を学習すれば、普通の日本語は充分に話せるし、普通の文章は書ける筈ではなかったか。高校の国語授業はどうなっているのだろう。

②最近の日本語の激変に社会と学校はどう対応しているのだろう。外国語の流入は激しく、それも略語、符号が交じり合い、訳語の洗礼を受けないまま、ストレートに入り込んでくる。科学技術の発達で発明発見のたびに新語が増産されるが、洋語まがいのカタカナ新日本語にどう対応してるだろう。官庁は、会社は、学校は、固い学術書の出版から文芸書、週刊誌、マンガの出版まで、日本語の表現は？テレビ・新聞の日本語表現が刻々変化していることは肌に感じるが、若者の生の表現が変化しているのはなかなかわからない。山本氏の投じた一文は、このような多様の問題をはらんでいる。さらに多角的な視点もあろう。湧き出る疑問、主張を望んで止みません。

＊このコラムでは、読者の方からの投稿もお待ちしています

逸話と世評で綴る女子教育史（27）

京都府上京30区・29区の正貞女紅場

神辺（かんべ）　靖光（やすみつ）（ニューズレター同人）

土手町丸太町通の新英学校女紅場を皮切りに全国各府県に女紅場ができていった。水野真知子氏は明治20年までにできた北海道及び27府県の100に及ぶ女紅場を調査しているが（『高等女学校の研究―女子教育改革史の視座から・上』）、まだまだ、その全体像はわからない。本稿は京都府の正貞女紅場（遊所女紅場ではないもの）その他いくつかをあげるに止める。

明治6年3月、上京30区柳馬場通押小路下ル虎石町の中井正太郎家を借りて女紅場が開かれた。設立願人は上京第30区の区長・田中松之介と副区長・吉田茂右衛門の両名で、費用は当区の積立金の利子と有志の寄付金でまかなうとした。これが京都の正貞女紅場第1号である。教授者2名と助教を雇い、「我国ノ衣服裁縫ハ勿論、洋服ノ仕立、養蚕、紡績等」を教え、世の務め、婦徳の道も教えるという。授業は午前8時から午後4時まで、日曜日は休業だが、午後2時から4時まで、「当今必用ノ翻訳書類及ビ婦道有益の書」を読み聞かせる。区内に住む貞実な老婦人を選び、当女紅場の教授者と生徒を監督する（女紅場規則）この監督取締には同区の大年寄で、かの柳池小学校をたてた熊谷直孝の妹のかうが就任し、三宅たつ子が和裁を、フランス人ジュリーの妻が洋裁を教えることで、この女紅場は発足した。
「女紅場規則」の冒頭に、これを設けた理由として次のように書かれている。

> 従来、縫物屋ト称スル者アリ。或ハ間々深窓ノ少女ヲ観劇ニ誘ヒ或ハ俳優ノ容貌ノ研美ヲ論シ以テ長日ノ徒然ヲ慰ムル者アリ。其弊或ハ其温良ノ性質ヲシテ遊惰放蕩ニ陥ラシメン。実ニ悲欺ニ不堪。然ルニ当今

文明日ニ開ケ、都鄙ニ学校アリ、少女モ口ニ孝経ヲ誦スル折柄、斯ル弊風ノ猶存スル有テハ彼幸ニ小学校ニ入リ、玉ト磨キシ少女モ所謂縫物屋ニ堕落シ瓦トナリ砕ケシ事ヲ恐ル

縫物屋と言うのは関東で言うお針屋のことだろう。武家の娘は原則として母親から裁縫を習うが、町家の母親はいそがしいし、裁縫を学んでこなかった者もいるから、町家の娘はお針屋で、それを習うのである。お針屋師匠は寺子屋師匠の妻女の場合もあれば、寡婦の賃仕事の場合もある。京都の縫物屋の生徒が俳優の容貌を噂し合ったり、芝居に誘ったりするのを如何にも放蕩堕落のように歎いているが、都会の娘のお喋りと芝居好きは京都に限ったことでなく、諸書によく出ているところである。「女紅場規則」で言うのは、お喋りしながら一日だらだら続けるマンネリ化した裁縫稽古を文明開化を機に締め直そうとしたものであろう。

同年4月、30区に隣接する29区御池通堺町西入町に上京第29区女紅場が開設された。願人は区長の多田佐兵衛と副区長の慶松勝左衛門である。女紅場運営は会社をたて、積立金を募り、その利子で行うもので、その規定が詳細に決められている。学科は衣服の裁縫、蚕桑、織績で30区女紅場と変りないが、その趣旨は30区とやや異る。

方今文化ノ盛ナル人々食力益世ノ務ヲ知リ百工競ヒ進ミ物産争ヒ興ル。婦女子ト雖、空手坐食ス可キノ時ニ非ス。故ニ此場ニ開キ区内一般少女ニ限ラス。現今、人ノ妻タル者モ入場ヲ許シ…女工ヲ教授シ以テ物産繁殖ノ一端ヲ開キ云々（第29女紅場規則前文）

と京都の産業振興の一翼を担う覚悟を示している。また、

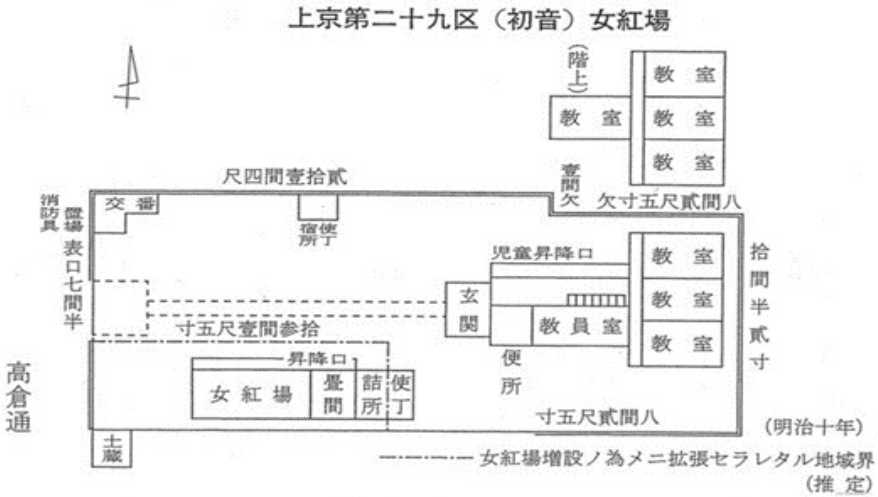
此場ノ設ハ生徒ヲシテ成業ナラシメン為ナレバ社中ヨリ新タニ布帛ヲ与ヘ各種ノ衣服ヲ裁縫セシメ其業ヲ習熟セシメン事ヲ企ツ（規則第25条）

とあり、

基本金ノ利子ト工料トヲ以テ毎月諸費ヲ償ヒ尚ホ餘リアルハ是ヲ益金トシ毎年6月12月ノ両度ニ社中出金高ニ応シテ是ヲ割渡スヘシ（規則第27条）

とあるから、女紅場で作った製品を売捌いて経常費に当てようとしたのであろう。さればこそ生徒製品について、区長、管事、裁縫教授、生徒立合のもとに評価し、上等者に褒賞を与える規定が細かく決められているのである（規則第11条、第12条、第13条）。

裁縫教授は芝田シゲ（和服）、下島ハル（洋服）で、監督者たる取締役には中島栄春が任命された。「生徒ノ女子班ヲ分ツテ坐シ裁縫ヲ習フ教師ハ諄々トシテ教ヘ、壁ニハ皇国輿地全図並ニ地球全図ヲ掛ケ萬事能ク行届ケリ」と「京都新聞67号」は伝えている。少女だけでなく妻女も受け入れた。早く教授者にして生産力を高めたいのであろう。授業料はない。授業は日曜日と月末2日を除く毎日午前8時から午後4時まで、日曜日は休暇だが、午後2時から4時まで、当今に必要な翻訳書と女子に有益なる書物を読まねばならない。「生徒其用具ニ俳優者ノ記号ヲ描シ又ハ淫奔ニ近キ書画類等ヲ携ル事及ヒ是ヲ談話スル事ヲ許サス」（規則第8条）とあって女性観は30区女紅場と変らない。この29区女紅場は図の如く同区の番組小学校の敷地内につくられたもので、この番組小学校は初音小学校として後年に続いた。



水野真知子『高等女学校の研究・上』より転載

【参考文献】『京都小学三十年史』、『京都府教育史・上』
水野真知子『高等女学校の研究・上』

1932年6月の東京帝国大学文学部教育学科教授評判記
―雑誌『東大文化』第2号の「クラスルーム」から―

谷本（たにもと）　宗生（むねお）（大東文化大学）

東京の高円寺にある古書店（都丸書店）にて何気に入手することができた、文化総合雑誌『東大文化』第2号（1932年6月）所収の「クラスルーム　東大教授評判記（文学部ノ巻二）」から、今回はとくに教育学科教授陣の評判記を紹介してみたいと思う。サイニィで同上雑誌の所在検索してみたところ、雑誌『東大文化』は創刊号（1932年5月）が東京大学明治新聞雑誌文庫で唯一所蔵（請求記号Z37:To17）される限りで、残念ながら2号以降の所在（現状の書誌データ上で）は何処にもないとされる。とすれば、私（谷本）の手元に今ある、この第2号もなかなか貴重なものといえるだろうかな。価値？はいかほど。

さて本論に戻ろう。同上雑誌の第2号（1932年6月）所収の「クラスルーム　東大教授評判記（文学部ノ巻二）」は、創刊号からの「連載特集」のようである。「創刊号の教授評判は愉快だつた。僕[文科生]も尻尾にのつけてもらふ文学部全学生が教員免許状をとる為にいやでも聞かねばならぬのが教育の講義だ。一体教育学生そのものが学的に認められるかどうか甚だあいまいらしいが、文学部では教授三人助教授二人講師一人[吉田熊次教授、林博太郎教授、春山作樹教授、入澤宗壽助教授、阿部重孝助教授、上村福幸講師]と云ふのさばり方で他に一寸ない。毎年教授三人で教育学、教育史、各科教授法を持ち廻りにやる。吉田教授、教育学界の権威である筈だが俗界には甚だ人気が悪い。額の禿げ上つた赫顔で、時に口をすぼめて処女の如くホホホホと笑ふ。むしろ奇怪だ。教育はその時の社会に適応する国民をつくる事であると云ふ訳で、ひたすら文部省の規定にそはんと努める。学生思想問題調査委員として、×××から帰つてきた学生との腹蔵なき話をきいて、何も知らぬ他の調査委員を驚かしたとか。林教授、初めの講義の時、あの溌

測として輝く栄養のいい禿頭を眺めて僕は田舎のしみだらけの薬鑵頭の親父爺を反対的に思ひ出して春の哀愁を覚えたのである。更に三種の神器の教育的意義から崇神垂仁の御世のお話を聴くに及んで、『神武綏靖…』と無暗に覚えさせられた、昔の記憶を甦らせ、神様を敬つた中学入学時分にかへり、『我等は中学一年生、嬉し嬉し…』と歌つてみたのである。黄色くくさつた様なノートを大事に鞄に納めソソクサとハドソンにのつて帰る貴族院の花形の姿に僕は教育学の本質をみた様に思ふ。春山教授、先日『朱光会』と云ふフアツシヨ団体が出来、その会長になられたと聞く。長年使ひならされたのか少し飛び出した口でノートもなく教壇を行つたり来たり一句一句講義して翌週にはどこまでしやべつたか文句を覚えてゐる。合間合間にはマルクス主義に学生が進むのは科学的な判断力が青年にかけてる為だ等とおつしやる。だか[ママ]科学とは？はて、誰か科学的精神とば[ママ]大和魂だと云つてくれる人はありませんか。朱光会の名誉会員にしませう。何？『朱交会』にしちやつて諺の様に…。コレコレ。入澤助教授、ペスタロツチを一廻り下品にした感じだ。非常な精力家で著書は断然ある。一つの材料をあつちの本にもし、こつちの本にもすると云ふ芸当は大学の先生にならぬと出来ない事だ。講義の内容は大抵、何かの本になつて出てるから僕達は安心だ。最近『入澤教育辞典』なる新聞広告を見た。『入澤式』とするともつと光ると思ふが。一般に教授となると名を売らなくもすむせいか著書が少い。吉田教授が小中学の先生を集めての夏期講習の速記録にいかめしい名をつけて要領よく二重儲けをする以外、林、春山教授は音を立てぬ。春山教授の去年の秋かに出した処女出版は大正十五年にやつたどこかでの講演と云ふ。…これはどうも筆が走りすぎた。悪く思ふなよ！先生方」（85～90頁）。

この「教授評判記」は、当時の大学生としての本音？かもしれないが、率直にいってなかなか過激ではないだろうか。笑。「編集後記」で、「『東大文化』の批判が、単に我々の間だけで為されるのは無意味である。…『傍観者の忠告』を与へられるのでなく、『東大文化』を諸君自身のものとして厳しい批判を与へられん」と表明している。

大正期における宗教系私学の大学昇格⑤
―真宗大谷派の2つの教育機関に関する考察(1)―

雨宮(あめみや)　和輝(かずき)(早稲田大学)

はじめに

1918(大正7)年に大学令が制定されると、従来専門学校の立場にあった私立高等教育機関(以下私学と示す)は、その多くが大学昇格を目指すようになっていく。

本号では、仏教系私学の一つの事例として、真宗大谷派を母体とする大谷大学を取り上げ、大学昇格につながる前段階における教育機関統合の動向に焦点を当てる。そして、この動向の中心となった真宗大谷派の2つの教育機関が、どのような教育方針で運営され、いかなる役割を担っていたのかを、仏教界の動向に詳しい雑誌である『中外日報』をもとに究明する。

1、一宗派の2つの教育機関

まず、真宗大谷派における2つの教育機関について、それがどのような性格のものであったのかを簡単に説明する。1900年代以降、真宗大谷派の教育機関は2つ存在していており、一つが、東京に存在した真宗大学、もう一つが、京都に存在した真宗高倉大学寮(以下、本文では高倉大学寮と表記する)であった。この2つの教育機関は共に真宗大谷派を母体とするが、それぞれの性格は異なっていた。『大谷大学百年史』は2つの学校の役割に関して「真宗大学は教育機関、高倉大学寮は宗義の統一およびその教導機関」[1]であったと述べている。

つまり、本山がある京都に存在し、且つ宗義の統一及び教導機関であるとされた高倉大学寮は、宗門の僧侶養成が中心の教育機関であった。その一方で、真宗大学は、学監を務めた清澤満之の教育理念を中心に、教育・研究

機関としての大学を目指して設立された[2]。つまり、真宗大学と高倉大学寮は、同じく真宗大谷派を母体とする教育機関であったが、その教育方針や人材養成の方向性は大きく異なっていたのである。また、真宗大学が東京に設立されて以降、真宗大学と高倉大学寮は思想的な面で対立する。その背景には高倉大学寮が、教育・研究機関として発展を続ける真宗大学を、宗義に反する人材を養成する温床となっていると認識していたことが大きく影響していた[3]。

2、京都への移転と各教育機関の状況

このように、京都と東京、2つの都市に真宗大谷派の教育機関は存在していたが、1910年以降、真宗大学が京都へ移転するのではないかという話が生じる。その説に関して『中外日報』では「真宗大学の京都移転説」という記事の中で言及している[4]。記事では、東西両大学の統一が真宗大谷派にとって大きな問題になっていることに触れている。この時点では真宗大学が明確に京都へ移転することが決まったという旨の話は述べられていない。しかし、この記事が掲載されて以降、『中外日報』には真宗大学の京都移転に関する記事を、多数確認することができる。

まず「真宗大学京都移転説　▲東京と京都何れが宗内の前途に益あるか」という記事では「真大の人は京都に於ては進取の気象に乏しく且つ青年有為の布教使を養ふに適せず、故に一派の最高伝道学校たる真大学は東京を措いて適当の地なしと實に然り」[5]として、真宗大学はその教育方針を考慮する上で、東京に位置すべきとする説を見ることができる。また「東派学制統一評」という記事では「真大は故清沢氏等の進歩的理想に依りて東京に移転せしものなれども移東十年以上を経るも特に東京に来りし価値を見出し難きものならず吾人より見れば東京となんら拘るゝ所なきが如し」[6]と、真宗大学が東京にある理由がないとする記事も存在する。このように、真宗

大学の京都移転は、真宗大谷派の教育機関のあり方とその実態を巡って、様々な意見が存在したのである。

では、実際の高倉大学寮と真宗大学は、社会からはどのような教育機関として認識されていたのだろうか。『中外日報』の「高真二大学の比較」という記事を見ると、記事の中で挙げられた以下の幾つかの点から、高倉大学寮と真宗大学が、社会からどのような教育機関として認識されていたのかを窺うことができる。

（イ）高大の学風は保守的なり、真大の学風は進歩的なり
（ニ）高大は非社会的にして、真大は社会的なり
（ロ）高大出身に文士少なく、真大の出身に文士多し
（ス）高大は宗意安心を本とし、真大は宗意安心を辯明せんとする学科を本とす[7]

以上の点を見ると、高倉大学寮と真宗大学の教育機関としての性格が社会からも大きく異なったものと認識されていたこと、さらに、真宗大学の方が「学風は進歩的」であり「社会的」な教育機関であると認識されていたことが窺える。同記事では最後に「東本願寺の将来に就てますゝ高大真大学の二個大学を東西両京に併立」[8]することが、宗門にとっても有益となる方策ではないかと述べられている。真宗大学と高倉大学寮は、同じ教育機関であっても、担う役割は大きく異なっており、そのため、真宗大谷派にとっては共に必要な組織であったと見ることができる。

3、おわりに

このように、高倉大学寮と真宗大学はそれぞれ性格の異なる教育機関であり、真宗大学に関しては既に東京で教育・研究機関としての運営を行っていたことを確認することができた。その一方で、高倉大学寮は、1911（明治

44）年に行われた卒業証書授与式では、卒業生が12名、残る在学生が7名しかいないなど、高等教育機関としては学生数に非常に困窮する状態にあった[9]。このように、高等教育機関としての性格、さらに、その実態も大きく異なっていた真宗大谷派の2つの教育機関は、その統一を巡ってさらに大きな動向を展開していくことになる。次号では、2つの真宗大谷派の教育機関がどのような過程を経て、結果的にどのような高等教育機関として結実したのかを明確にする。

註

[1]『大谷大学百年史』（2001年、大谷大学百年史編纂委員会）、242頁。

[2]『同書』（2001年、大谷大学百年史編纂委員会）、164-165頁。

[3]『同書』（2001年、大谷大学百年史編纂委員会）、242頁-244頁。

[4]「真宗大学の京都移転説」『中外日報』（中外日報社、1910年12月21日、3225号）2頁。

[5]「真宗大学京都移転説　▲東京と京都と何れが宗内の前途に益あるか」『同書』（中外日報社、1910年12月23日、3227号）3頁。

[6]「東派　学制統一評」『同書』（中外日報社、1911年1月19日、3249号）2頁。

[7]「高真二大学の比較」『同書』（中外日報社、1911年1月30日、3260号）1頁。

[8]「高真二大学の比較」『同書』（中外日報社、1911年1月30日、3260号）1頁。

[9]「高倉大学寮卒業式」『同書』（中外日報社、1911年6月29日、3405号）2頁。

学生課・学生部について③

『九州大学五十年史　通史』

山本（やまもと）　尚史（ひさし）（長崎女子短期大学）

前回の第26号では『日本近代教育史辞典』を紹介し、「学生主事・生徒主事」の項目を取り上げた。文部省学生課は思想対策を担う組織であり、そして文部省所管の直轄学校に配置された指導と訓育を担う学生主事・生徒主事は「専任制」をとった。

今号からは各大学の年史を検討していきたい。各大学の個別事例を詳細に扱っていることは勿論だが、大学毎に文部行政の中での位置づけが行われていることは学生課・学生部の全体像を考える上で、重要な点であると思われる。今号では『九州大学五十年史　通史』（以下、五十年史）を取り上げる。学生課・学生部については「第2章　満州事変と九州大学」の「第3節　思想善導」で詳しく述べられている。

昭和3年10月、文部省に学生課が置かれたが、その際の予算的措置について以下のように述べられている(注1)。

昭和3年文部省の思想善導費責任支出の件について、文部・大蔵両省の妥協が成り、9月11日の閣議で総額146,548円の責任支出を可決した。その内訳は、(1)文部省内に思想調査機関設置に要する経費23,411円　(2)大学および直轄諸学校学生生徒指導訓育に要する経費123,137円である。この経費によって同年10月文部省内に学生課が新設され、学生の思想問題を所管することとなり、全国の帝国大学・官立大学その他の直轄学校に都合63名の学生生徒主事(従来の学生監・生徒監)が配置された。

これによれば文部省学生課は思想調査機関であり指導訓育を担う組織

である。この時、帝国大学に配置された学生主事・学生主事補は以下の表の通りである(注2)。

	学生主事	学生主事補
東京帝国大学	3人	5人
京都帝国大学	3人	5人
東北帝国大学	2人	3人
九州帝国大学	2人	3人
北海道帝国大学	1人	2人

表:帝国大学に配置された学生主事・学生主事補の数

このように配置された学生主事・学生主事補は各大学の現場でどのような仕事をしたのか。五十年史によれば九州大学では、2名の学生主事が配置された。昭和3年の段階では大岡叢と岡部龍玄であったが、昭和4年には岡部龍玄と前田稔靖の2名となった。岡部・前田の両学生主事は昭和16年まで配置されている。

五十年史では学生主事の仕事として「学友会を統轄して学生の学内における活動を監督した」と述べられている(注3)。この学生主事の仕事振りは「反動教育」の一環として学生たちに位置づけられたことが多かったようであるが、九州帝大では目立った反対運動は見られなかったとされている。ただし、九州帝大の学生は学友会主催の運動会における「思想善導競争」という競技種目を「学友会・学生課御後援の目的を達したわけである」と考えていたようである。五十年史によれば、これは学生課・学生主事に対する「揶揄」であり、「思想善導に対する学生たちの精一杯の戯画化であったといえよう」と述べられている(注4)。このように九州帝大では顕著な反対運動は無かったものの、学生課の取り組みに対して学生たちは冷ややかな目を向けていたようである。

今号はここまでとし、次号以降も紹介を続けていきたい。

(注1)九州大学創立五十周年記念会『九州大学五十年史　通史』1967年、307頁。

(注2)同上、307頁。

(注3)同上、308頁。

(注4)同上、308頁。

近代日本における大学予備教育の研究(27)
―予科の学科課程　日本医科大学②―

山本　剛(やまもと　たけし)(早稲田大学大学史資料センター)

はじめに

前号では、1926(大正15)年に設立認可された日本医科大学が大学予科の修業年限を二年制から三年制に延長した理由を検討した。

同大学が1933(昭和8)年8月10日付で文部省に提出した学則変更の認可申請書では、中学校第四学年修了者を収容して、三年制の予科で予備教育を施すほうが、「専門諸学科」を修めるのに「適切」である、と記されていた。それは「語学」の習得にとって「有効」であり、さらに中学校最終学年を受験勉強に費やすよりも、一年早く大学予科に入学させて、「実験実習等」の時間を多く課したほうが医学の予備教育にとって適切であるという意向であった。

それでは、三年制の同大学予科の学科課程はどのようなものであったのだろうか、また同大学学長の塩田廣重はそもそも大学予科をどのように捉えていたのだろうか。

本号では、同大学予科が三年制に延長した際の塩田の発言を考察することで、予科に対する彼の考えを明らかにするとともに、同大学予科の学科課程を検討することを課題とする。

1、学長塩田廣重の予科に対する意見

はじめに同大学学長の塩田廣重が大学予科をどのように捉えていたのかを検討する。

塩田は、1935(昭和10)年4月9日の「職員会」で、教職員に向かって、帝国大学のように高等学校を卒業した者を収容して、学部で「色々な寄合世帯の

学生を教授」するよりも、大学予科で医科大学の「教授すべき目的に叶ふ」ような「予備智識を与へる」ほうが、学部にとっては「大変便利」であると主張していた[1]。

すなわち、塩田は医科大学の予備教育のためには、高等学校より、自校の大学予科で教育を行うことが必要であると考えていたのである。(他大学関係者の大学予科に対する諸意見は同レター第14号を参照)

続いて予科の教育内容に関して、塩田は前年の1934(昭和9)年に同大学予科が三年制になった際、同年4月12日の「職員会」で次のように語った[2]。すなわち、従来の修業年限二年制の大学予科ではドイツ語の「充分なる教育を施すこと」は「無理」であったが、三年制に延長して、ドイツ語の「習得も幾分実用に足る程度に達する」だろう、と言うのである。

このように大学予科の修業年限が延長された際に塩田が語った発言からは、なによりも大学予科ではドイツ語の習得が重視されていたと解することができる。

さらに塩田の発言に注目すると、1937(昭和12年)年4月21日の大学予科宣誓式で、彼は新入生に向かって次のように伝えた[3]。

塩田は、大学予科で学ぶ学科目の「数学理化学語学等は一見洵に医学と縁遠い」ように考えられるが、医学を修めるためにはそれらの学問は必須である、と述べた。そして「例へば病気の診断に必要な血液或は血液に類して居る組織内の液体の検査又体外に排泄さるゝところの糞便尿等の性状を検査する」には、「化学或は理学の知識なしには理解することが出来ない」し、さらに「病の根源を察する」ためには数学や理化学の習得は不可欠であると強調して、大学予科で学ぶ学科目を「充分に身を入れて習って」おくことが大切である、と生徒に伝えた。さらに、塩田は「我国では現在の医師に必要な学問」が「後れて進んだといふ関係上、外国の言葉を知ら」ないと、「深く学を進めて行くことの出来ないのは洵に遺憾」であるとしながらも、「先進国に追付いて行かうといふ我国の現状」のなかで、いずれ日本語で「十分な研究が出

来る」ようになるまでは、専門の医学を修めるために第一に外国語を習得しなければならないと強調した。

このような塩田の発言からは、医学のための「予備智識」が、数学や物理、化学であることを意味したと同時に、大学予科では外国語の習得を極めて重視していたことを証している。

次に、同大学予科の学科課程を検討する。

2、日本医科大学予科の学科課程

同大学予科三年制の学科課程は以下の通りである[4]。

表　日本医科大学予科の学科課程

科目	毎週授業時間数		
	第一学年	第二学年	第3学年
修身	一	一	一
国語漢文	四	二	
独語	十一	十一	十一
物理		三	講義三 実験二
化学	二	二	講義二 実験二
生物学	二	講義二 実験二	講義二 実験二
心理	二	一	
ラテン語			一
英語	二	二	二
数学	四	三	二
法制経済	二		
体操	三	三	三
計	三三	三二	三三

このように学科課程編成を見ると、前述の塩田の発言にあるように、同大学予科ではドイツ語の授業時間数が多く課してあることがわかる。ちなみに二年制の時は、毎週授業時間数は第一学年時で9時間、第二学年時で9時間の計18時間であったが、三年制になり各学年11時間の計33時間に増えている。なお、ドイツ語の授業時間数は先に検討した東京慈恵会医科大学予科よりも日本医科大学予科のほうが多く課してある。

ただし日本医科大学予科では、このようにドイツ語の授業時間が多い一方で、英語の授業時間数は各学年とも2時間と少ない。これに関しては、同大学沿革史(1940年刊行)によると「英語は高等学校に比し時間少きも教材を医学関係方面に求むる等相当特色あるを認めて居る」と叙述されている[3]。

この「教材」がどのようなものであったのかを明らかにすることはできないが、英語の授業では医学関連の英書を使用して、英語と医学に関わる事項を、少ない授業時間のなかで学習したものと推察される。

ところで、同大学予科の修業年限延長理由として学則変更の認可申請書に記された「実験実習等」の時間を多く課すというのはどうであったのだろうか。この学科課程編成を見ると、たしかに物理、化学、生物学の第3学年(生物学は第2学年、第3学年) で実験の時間を設けてある。しかし、これは第1学年時から課しているわけではなく、高等学校の学科配当とほぼ同等であった。

これに関しても同大学沿革史(1940年刊行)によると、「実験実習の設備は一学級分を有するのみであるから、高等学校教授要目に據り原則として三学年にのみ之を課するの現状に在る」と叙述しており[5]、実験実習の時間を増やしたくとも施設設備面でそれらを増やすことができない事情であったことが窺える。

ただし、こうしたなかでも「一週二時間の規定時間以外、放課後其他の空き時間を利用して、自由に実験室に出入せしめ、自発的研究の興味を以て実験に従事するやう指導を加へつゝある」と、同沿革史では叙述しており[6]、実験実習の時間を生徒に与えようとしていたことは窺える。

以上、日本医科大学予科の学科課程を検討したが、同大学予科では物理や生物学など、医学を学ぶうえでの「予備智識」を重視した。

さらに、同大学予科は、東京慈恵会医科大学予科に比べても、ドイツ語の習得を重視していた。それは医学という専門学を学ぶうえで必須である、と同大学では捉えていたのである。

---

[1]「学長職員会における挨拶　(昭和10年4 月9日)」『日本医科大学十五年史』(日本医科大学、1940年)、112頁。

[2]同前書、「学長職員会における挨拶 (昭和9年4月12日)」、106頁。

[3]同前書、「日本医科大学予科新入生宣誓式学長訓示」、147頁－148頁。

[4]同前書、360頁－361頁。

[5]同前書、380頁－381頁。

[6] 同前書、359頁。

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究への道（27）
学校沿革史にみる補習科・専攻科（23）：広島県（1）

吉野（よしの）　剛弘（たけひろ）（東京電機大学）

今号からは、広島県の補習科について検討する。

これまでに検討してきた3つの県と異なり、広島県の補習科は、その存続期間が長くない。そもそも記録自体が少ないということもあるのかもしれないが、学校沿革史における扱いも小さい。

しかし、広島県を検討対象とするのは、早い段階で補習科を廃したことにある。このような短い歴史しか有しない補習科は、学校沿革史ではどのように語られるのだろうか。今号では、補習科の設置の経緯と設置後の状況について検討する。

呉三津田高等学校は、戦前に同窓会が補習科を設置していた旧制呉第一中学校を前身に持つ学校であるが、この学校にも補習科が設置された。なお、引用に出てくる呉宮原高等学校とは、旧制呉第二中学校が前身である。

本校に補習科を開設　一九五一（昭和二六）・四

一九五一年（昭和二六）四月、卒業生に対して学力充実を図るため補習科を開設した。本校卒業生を主体とし、他校卒業の希望者を選抜して加え、週五日、午後五時三〇分から八時三〇分まで、本校教員が指導に当った。一九五四年（昭和二九）の職員会議録によると、一週二四時間、午後一時から五時まで開講し、経費は模試代・用紙代・入会金等を含めて二、〇〇〇円であった。尚、この年には宮原高校にも補習科が設立されたので、宮原高校卒業生は受け入れないことにしている。（『創立八十年記念誌　三津田ヶ丘』（呉三津田高等学校，1986），pp.342-343）

自校の卒業生のみならず、他校の生徒も入れるという。これは戦前の補習科の名残というべきものだろう。しかし、戦前の補習科とは異なる点が開講時間である。当初は夜間開講、後に午後開講となっているが、午前中から始まるであろう本科と始業時間が異なる。本科の教員が授業を担当するため、兼務がしやすいように配慮したものと思われる。戦前の補習科や戦後の専攻科のように、制度化されていないため、本務の合間を縫わなければならなかったということなのだろう。ただし、これまで検討してきた他県の事例のように、本科と同じ時間に開講する方策がないわけではないので、そのような対応を取らなかったということは注意を要する。

また、毎日4時間しか開講されないということは、総授業時数にも影響する。さまざまな制約から致し方のないこととはいえ、受験準備教育として十全に機能し得たのかという疑問が残る。

福山誠之館高等学校（補習科設置当時は福山東高等学校）は、福山誠之館中学校を前身に持つ学校であるが、この学校にも補習科が設置された。

夜間講習　一九五二（昭和二七）年五月二二日の校務日誌に、「午後五時より夜間講習の開講式、引き続き授業を行う。」とある。新学校制度にあっても、旧制高校、専門学校等旧制中学からの上級学校受験同様、大学受験が生徒にとって大きな関門であることに変わりはなかった。その要請に応えて開かれたのが「夜間講習」であった。

福山東高校、福山南高校（葦陽校舎）、広大附属高校の三校の保護者の要望によって生まれたのが夜間講習であり、福山東高校の階段教室を使用して授業が行われた。

この夜間講習はその後、実施会場を寄宿舎（里仁寮）に移し。長期講習と名称を変え、福山誠之館・福山葦陽・広大附属の三校PTAによって組織的な経営がなされていった。（誠之館百三十年史編纂委員会編

『誠之館百三十年史』下巻（福山誠之館同窓会，1989），p.84）

この講習会の設置主体はPTAである。PTAの関与は他県でも見られることであり、特段珍しくはない。

また、この講習会も夜間のみの設置である。その理由は、呉三津田高等学校と同じであろう。さらに、この夜間講習会は、複数の学校で創設されたものである。これはきわめて特徴的であるが、現段階で詳細は不明である。どのような経緯で共同での設置に踏み切ったかの検討は他日に期したい。

国泰寺高等学校は、旧制広島第一中学校を前身に持つ学校であるが、この学校にも補習科が設置された。

補習科の設置　　一九五五（昭和三〇）年四月二十日発行の国高新聞に、補習科に関する次のような記事が見える。

四月九日、本校補習科の入学試験が行われた。定員九〇名に対して一七四名が押しかけ、一・九倍の競争率で試験科目は英・数・国の三科目であった。

（中略）

五〇年六月に五十名の定員で本校に補習科を置くということになった。これは本校卒業生で本年度大学入試を目指して家庭で学習している者のために、毎日午後五時より九時まで定時制の時間に合わせて授業をするということで募集をはじめたのであった。この補習科は年々生徒が増加し、県下の高校から浪人か集まって来て五三年には夜間と昼間の両方に置くことになった。そしてついに五六年には総数百三十名に達するという盛況（？）ぶりで、入学希望者数多数のためそれを振い落す選考試験までしなければならなくなったのは、前述の国高新聞からの引用で明らかであろう。（広島県立国泰寺高等学校百年史編集委員会編『広島一中国泰寺高百年史』（母校創立百周年記念事業会，1977），

pp.601-602）

ここの補習科も夜間開講に始まり、後に午後クラスと夜間クラスが置かれるようになっている。夜間開講というのは、広島県の補習科の特徴の一つと言えそうである。

この補習科では、志願者が多数のため、入学試験も実施したという。補習科の入学に試験を要するというのは、島根県でも見られたことであるが、それ相応に人気はあったということでもある。

しかし、各校それ相応に人気を博しながら、広島県の補習科は1950年代後半から1960年代前半に廃止に追い込まれる。その理由は何なのか。次号はこの点について検討する。

学生寮の時代⑯

―寄宿舎の「弊害」とは何か―

金澤（かなざわ）　冬樹（ふゆき）（東京理科大学職員）

先号では、明治34（1901）年、3回にわたって掲載された幸津国太郎「寄宿舎の弊害及其大原因」[1]の内容のうち、「現今寄宿舎の状況」である舎監の問題を紹介した。今回は、幸津が寄宿舎の「弊害」についてどのように指摘しているのかを確認したい。

●寄宿舎の「利益」と「弊害」

まず幸津は、寄宿舎教育の「弊害」を指摘する前に寄宿舎教育の「利益」を10点挙げている。

（1）「規則を守り秩序を重んずること」
（2）「業務に規律あること」
（3）「勤勉なること」
（4）「娯楽の純潔なること」
（5）「社会の悪影響を受けざること」
（6）「品性を練磨すること」
（7）「共同心を養成すること」
（8）「友誼を厚くすること」
（9）「勉学に便利なること」
（10）「学資金を要すること少きこと」

各点については2点を除いて説明がなされておらず、簡略な主張にとどまっている。以下では幸津が挙げている「弊害」の10点を見てみよう。

（1）「規則の厳密且繁雑なるより来る弊害」

寄宿舎は多くの学生が共同生活を送るため、それに伴う規則が設けられることになる。ただそれは「起り得べき総ての場合を網羅せる規則を制定し、之を厳格に実行する外あらず」という状態を生み出しているという。生活の微細に入り“規則づくめ”になってしまうということだ。寄宿舎は「血気旺盛精気八方に溢るゝ若者」を「厳格なる寄宿舎に閉ぢ籠めて、四肢の運動を拘束し、汝は大人らしくなれ教師らしくなれと強ふ不自然至極寧ろ残酷と云はざる可からず」と批判している。世間で師範学校出身者が「箱詰先生」と評され、「謹慎に似て其実不活発、沈着に似て其実無能なる凝結男子」が多い原因にもなっていると指摘する。

（2）「生徒の編制法及生徒間に階級あるより来る弊害」

寄宿舎運営の上で、生徒に上下関係ができてしまい「新参の苦痛」が生じる。

（3）「舎監の監督及ばざるより来る弊害」

大勢の寄宿生がいる中、舎監の目が行き届くのは難しい。幸津が指摘するのは寄宿舎生の「仮面的性向」、つまり面従腹背の雰囲気である。「直に其肺肝を衝き、根底的改心をなさしむる」ことは容易ではなく、舎監の訓戒は「形式的皮相的」にとどまるなど、「舎監は生徒を訓育する如きは、殆んど望むべからず」とまで述べている。舎監を務める者は「寄宿舎事務長位の心得で安んずる」か、「自ら生徒の餓鬼大将」となって生徒と「蛮行を楽しむ」ことの他ないという。

幸津は「舎内怠惰生の魔力」について興味深い指摘をしている。「校長の数時間に渉る修身講話も、此種の生徒（舎内怠惰生―筆者注）にして若し一言冷評すれば、全生徒直に相和し、其訓戒を一笑に付し去ること少なからず、舎監の縷々数万言は、此種の生徒の喫煙室に於ける一言にて霧消すること

あり」と寄宿舎生の“習性”を紹介している。幸津も「実に奇妙不可思議の現象」というように、集団生活もしくは青年集団の“習性”を考える上で興味深い指摘といえよう。

（4）「舎監と生徒と親密ならざるより来る弊害」

舎監と寄宿生の関係が、「生徒の顔さへ知らざるがある」状態がある。そのような関係では寄宿生が「赤心を打ち明くる」こともなければ、舎監が「訓育」を行うこともできないとする。

（5）「寄宿舎の快楽少きより来る弊害」

寄宿舎では規則や動作などが決められており、舎監や上級生の「監視」されている空間であり、「一種世に比類なき社会」と指摘している。幸津は自身の寄宿舎生活経験を踏まえ、「放課時間来れば、鳥の籠より出づる心地にて外出し、暫くして門限時に帰て門に入れば、嘔吐を催すがごとき」寄宿舎生の意識を紹介している。寄宿舎に設けられている談話室なども「乾燥無趣味の室」であり、寄宿生が密かに市内に下宿を構え「寄宿舎の不快を癒する」場合も多い。ただ環境の悪い下宿にあって「如何なる害毒を受くるか」は「読者の熟知する処ならん」と述べており、このような下宿の状況が広く問題視されていたことうかがわせる記述でもある。

（6）「寄宿舎の社会一般と隔離するより来る弊害」

閉鎖的な生活の中、「社会教育」を学ぶ機会がない。

（7）「舎監の更迭頻繁なるより来る弊害」

（8）「舎監の適任者得ざるより来る弊害」

（9）「多数なるにより自ら反省する機会少なきこと及病毒伝染の危険あること」

（10）「学校紛擾」

昨今発生している学校紛擾では、寄宿舎や舎監に関する事案が多く、寄宿舎が学校紛擾の一因になっていると指摘する。

以上が幸津が挙げる寄宿舎の「弊害」である。厳格な規則の下、舎監と寄宿生の良好な関係が築かれにくい状況であることが指摘されている。特に具体例が紹介されておらず、抽象的な議論も見受けられるものの、寄宿舎教育に関係（寄宿生としての経験、教員としての経験）した者の捉え方として、読み取ることができるだろう。

次回は、寄宿舎の「弊害」をもたらしている「大々的原因」と幸津が指摘している点を見てみたい。

---

[1]幸津国太郎「寄宿舎の弊害及其大原因」『教育時論』(上)第575号、(中)第576号、(下)第577号、1901年。

どんなことが「自治ではない」とみなされたのか（25）
―東京府立第一中校学長川田正澂の校友会活動観(その9)―

冨岡（とみおか）　勝（まさる）（近畿大学）

府立高等学校校長としての川田正澂

前号では、東京府立第一中校学長川田正澂が旧制高等学校の寄宿舎自治に対して批判的見解を述べていた1926年の史料を紹介した。

周知のように川田は、1928年2月に設置された七年制高等学校である府立高等学校の校長に就任している（府立第一中学校校長を兼任）。既存の旧制高等学校の課外教育の象徴の一つであった寄宿舎自治を批判した川田は、府立高等学校の生徒に対する教育のなかで、「自治」をどのようにとらえていたのだろうか。

府立高等学校に寄宿舎が設けられたのは1943年のことである。川田の校長在任は、1935年12月に死去するまでの7年間であるので、川田の校長在任中は寄宿舎が設けられていない。第1回～第3回入学者の本籍地は、東京府が全体の5割を占めていたが、新潟、長野、愛知県などからも受験者が多く集まった[1]から寄宿舎の需要はあったと想像できる。寄宿舎をつくらなかったという点には、前号で紹介した川田の旧制高等学校観が反映しているものと思われる。

寄宿舎をつくらなかったこと以外には、多くの旧制高等学校の生徒が着用していたマントではなく、図のようなボタン付き外套を制定したという点も、川田の教育観を象徴しているのかもしれない。この点は、例えば以下のように指摘されている。

> 開校三年後、府立高校は、当時、杉の木立、竹藪と坂道、そして農家と植木が点在する近郊の目黒・柿の木坂（府下荏原郡碑衾町）の新校舎に移転した。「生徒」の大部分は自宅からの通学生で、高等科生も、制服に長袖・ボタンつきの外套を着用し、茶色カバンで通学した。川田

校長が英国のイートン・スクールを理想に「紳士教育」をおこなうことを強調し、マントを禁止したためである[2]。

これら2点以外に川田が府立高等学校においてどのような独自の教育方針をとったのかについてはよく分からない。校友会活動などの生徒の自治的活動に対して、他校と異なる方針をとったのかどうかも、今のところよく分からない。

例えば以前紹介したような府立第一中学校における対外試合禁止方針は、府立高等学校ではスポーツの対外試合が行われていることから考えて、少なくとも高等科については府立高等学校では採用していないと考えられる。

『東京都立大学三十年史』では、川田が新設の高等学校としての理念をそれほど主張していなかったとして、次のように述べている。

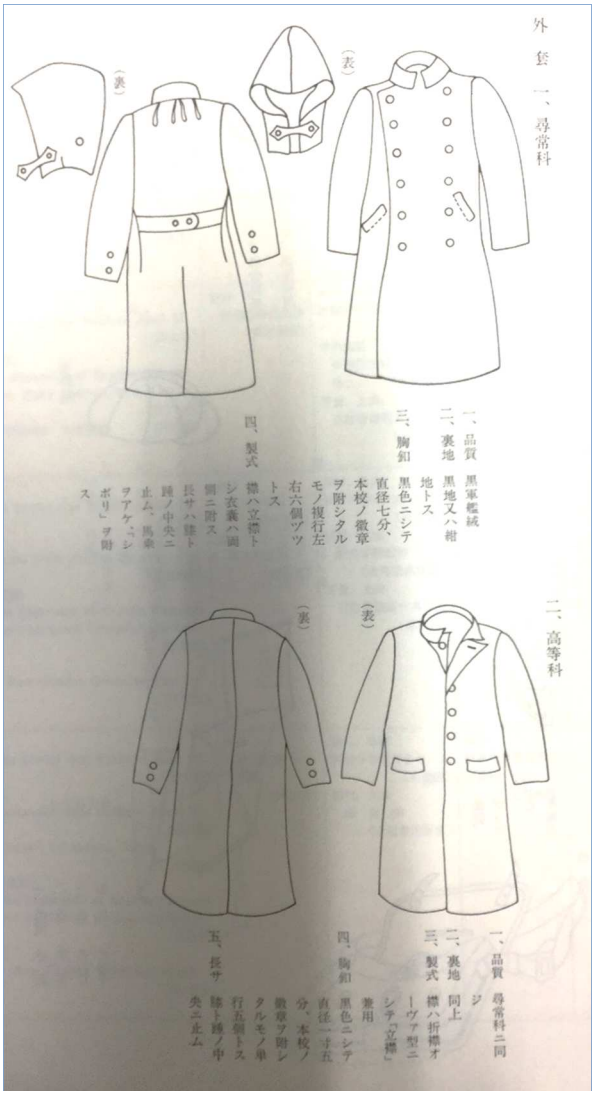


図　府立高等学校制定の外套（尋常科および高等科）
『府立高等学校五十周年記念誌』（府立高等学校同窓会、1979 年）167 頁より

第一次世界大戦後に流入しつつあったブルジョア自由主義教育思想の影響で、府立五中などでもイギリス流の紳士教育が行われた。つまり同校長〔川田のこと、引用者注〕は、当時、一部にひろがり始めた中等教育方針をもって府立高校にあてたにすぎず、とくに新設高校にふさわしい理念を主張したわけではなかった。それに対して、「生徒」のなかには「伝統」的なマントを着用することで抵抗するものがあった[3]。

一方、吉松安弘『旧制高等学校生の青春彷徨　旧制府立(都立)高等学校の昭和時代』では、1929年4月6日の府立高等学校第1回入学式において川田がイギリスのパブリックスクールに触れながら次のような趣旨の教育方針を述べたとして、以下のように紹介されている。

イギリスのイートン校にも触れると、かの国のパブリックスクールが日本の高等学校と同じように、社会の指導的立場に立つ人物養成を目的としていることを述べつつ、英国魂の涵養を主眼とした彼らの格調高い教育方針を尊崇し、そこに、日本の高等学校が伝統としてきた自由と正義を重んじ真理を愛好する、自主的な精神を行かしてゆくと決意を述べた[4]。

川田は、七年制の府立高等学校のことを「東洋のイートン」と秘かに呼んでいたという[5]が、従来の高等学校の教育方針と府立高等学校の教育方針が具体的にどのように異なるのか、私ははっきりとは分からない。寄宿舎の有無以外は、ボタン付き外套とマントとの違いだけで中身は大して違わなかったのだろうか。あるいは外見の違いが、生徒の自主的活動に関する考え方にも影響を与えたのだろうか。現時点では何ともいえない。

府立高等学校校長としての川田の教育方針をどうみるかについては、本格的に分析した先行研究がなかなか見つからない。首都大学東京の図書館に『校友会雑誌』（府立高等学校校友会第二部会、1933年から1937年）と

『校友会雑誌』（府立高等学校文芸部、1932年から1940年）が所蔵されていることを先日知った。そのうち調査に行って、分かったことがあれば報告したい。

学校における学生・生徒の「自治」の捉え方について、このニューズレターで少し紹介してきた明治中期の第一高等中学校木下広次校長、明治後期の松本中学小林有也校長、そして大正・昭和初期の府立一中・府立高等学校校長の川田正澂などを、もうすこしつっこんで比較していくとのも面白いのでは、と考え始めている。

---

[1] 『東京都立大学三十年史』東京都立大学、1981年、30頁。

[2] 前掲『東京都立大学三十年史』、30頁。

[3] 前掲『東京都立大学三十年史』、30頁。

[4] 吉松安弘『旧制高等学校生の青春彷徨　旧制府立(都立)高等学校の昭和時代』渓流社、2012年、31頁。

[5] 前掲『旧制高等学校生の青春彷徨　旧制府立(都立)高等学校の昭和時代』、9頁。

『月刊ニューズレター　現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項（2015年6月15日現在）

1.（目的）広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。

2.（記事のテーマ）記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。

3.（刊行頻度・期間）研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。

4.（編集委員会・編集世話人）発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は冨岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。

5.（執筆者）執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。

6.（記事の責任）記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせることがあります。

7.（記事の種類・分量）記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。

8.毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少部数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。

9.ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/

10.ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。

11.以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

編集後記

人が生来もつとされる正義感の実証研究成果の一端が、本年1月末に京都大学の研究チームから世界的に発表されました。驚。ヒトは生後早期から、攻撃者、犠牲者、正義の味方の関係性を理解し、正義の味方のような行為を肯定する傾向をもつことが明らかにされました。「正義」の行為を理解し肯定する傾向は、学習の結果というよりも、人に生来的に備わっている性質である可能性が高いといえるのでしょう。（谷本）

この時期、大学周辺の書店には授業履修のための(学生による)情報誌がたくさん並んでいます。どの授業は楽しいだとか、単位は楽勝だとか、オニだとか…、さらには授業担当者の性格に至るまで…、実に正しい？授業評価が掲載されています。もしかしたら今後の大学沿革史編纂のためには、これも貴重な資料？として収集する必要があるかもしれません。(山本剛)

「いなほ焼」という食べ物をご存知でしょうか。長崎県大村市生まれの「粉もん」です。今川焼のような形をしています。お好み焼きでもなく、もんじゃでもなく、たこ焼きでもない「粉もん」です。ソースも何も要りません。ただ出されたものを食べるだけで絶妙においしい。何のことはありません。卒業式を目前に控え、学生も来ない日常の中で、ふと食べたくなったのでここに書いてしまいました。かなりおいしい一品です。（山本尚史）

大学と軍事研究の関係が問われています。日本学術会議などで議論が進められていますが、他人事ではいられません。大学関係者として、自らを、そして大学の在り方を考える機会にしなければならいないと、自覚を新たにしています。（金澤）

春休みを利用して海外旅行に出かける人もあるかと思います。海外に出かける際は、外務省が提供している海外安全情報サービス「たびレジ」に必ず

登録して出かけてください。緊急情報を受け取ることができます。また、海外旅行の予定のない人向けの簡易登録もあります。是非ご利用下さい。
https://www.ezairyu.mofa.go.jp/tabireg/

（小宮山）

同級生に誘ってもらい、大学の学部時代の恩師に会いに宮崎へ行ってきました。90歳を過ぎても新たな本を執筆している恩師から、「楽しく勉強し続けていれば、研究成果は自ずと生まれる」という言葉をいただきました。忙しいときでも勉強を楽しみ続けようと、気持ちを新たにしました。新学期からもよろしくお願いします。（冨岡）

宮崎に行く途中で立ち寄った鹿児島県立図書館
鶴丸城二之丸跡にあります。右端に映っている門柱は旧制第七高等学校造士館のものだそうです。